

## 論文審査の結果の要旨

氏名：山 村 結 花

博士の専攻分野の名称：博士（総合社会文化）

論文題名：グレアム・グリーン文学における表象の研究

審査委員：(主査) 教授 竹 野 一 雄

(副査) 教授 松 岡 直 美 教授 眞 邊 一 近

### 1. 本論文の目的

本論文は、グレアム・グリーン（Graham Greene, 1904-1991）の小説世界を構成する諸要素のうち、事物による表象に着目し、その特徴を明らかにするとともに、彼のカトリック小説のみならず、いまだ十分に研究されていない1980年代に公刊されたグリーン晩年の三作品を、事物による表象の観点から新たな解読を試みることを目的とする。

### 2. 本論文の構成

序 論

第一章 先行研究

第二章 西洋における悪

第三章 グリーンランドにおける悪

第四章 『叔母との旅』（1969）

第五章 80年代の作品考察——『ジュネーヴのドクター・フィッシャーあるいは爆弾パーティー』（1980年）——

第六章 80年代の作品考察——『キホーテ神父』（1982年）——

第七章 80年代の作品考察——『キャプテンと敵』（1988年）——

第八章 グリーンの作品との比較考察

結論

文献一覧

### 3. 本論文の概要

序論においては、二十世紀のイギリス小説の特徴を簡潔に概観し、そのなかで、グリーンの小説がどのように評価されているのかを把握したうえで、本研究のテーマ選定の理由・根拠、研究方法を提示し、研究の意義を提示している。

第一章においては、国外、国内双方における先行研究を総括している。国外では1950年代から既にグリーン研究が盛んであり、現代においても研究は継続されている。近年、国外におけるめぼしい研究文献としては、クリストファー・ヒッチェンズ（Christopher Hitchens）が“Death From A salesman: Graham Greene’s Bottled Ontology”と題する論をペンギンブックスの*Our Man in Havana*（London: Penguin Books, 2007）の“Introduction”として記している。そのなかで、ヒッチェンズは、第三、あるいは、下位範疇としてウイスキー（ウイスキーが含まれていないものに対するものとして）フィクションを提案し、『ハバナの男』（*Our Man in Havana*, 1958）におけるウイスキーに着目した論を展開している。そして、ドナト・オドンネル（Donat O’Donnell）は、『事件の核心』におけるロザリオや動物が、人間には不可避な肉体の凋落や神なき世界の恐怖を表わすほぼ伝統的なシンボルとして解読を試みているものがある。他方、わが国においては、1945年以前の戦中と戦前には記録として残るグリーン論文・記事は見当たらないが、すでに、グリーン作品は映画関係者のあいだで読まれていた。その後研究は進展したものの、2000年に入り、山形和美編集・監修『グレアム・グリーン文学事典』（彩流社、2004年）が出版されてからは、グリーン研究に関する特に目立

った研究書は出版されていない。

大半の先行研究においてその論考の中心となるものは、グリーンの人生や経歴を把握したうえでの物語のプロット、語り、また、登場人物の人物像に象徴される罪や悪、憐憫、墮落や信仰心の欠如、残忍性、人間自身および社会における矛盾とそのなかでの葛藤という多様な主題であり、また、エンターテインメントとノヴェルというジャンル分けの概念をもとにした考察や、グリーンが描き出す宗教論と政治論に関するものも多く、グリーン晩年に当たる1980年代に出版された作品に関する研究よりも、カトリック四作品をはじめ、政治色豊かな1970年代までのグリーン作品に関する研究が多数を占めていると山村氏は先行研究を総括している。

第二章「西洋における悪」においては、グリーンが執着して描き続けた悪を理解するにあたり、西洋における悪の描かれ方を検証している。本来、根源的悪とは、ヘブライ・ユダヤ教における神との関係の破綻（神との契約違反を含む）であったが、新約聖書においては、悪はキリストの拒否として提示されている。20世紀の大戦で全体主義支配による記憶の抹殺という巨大悪が誕生したことで、キリスト教思想における「悪」とは、個人の道徳的悪であり、黙示録的で超自然的な悪である、という包括的なものとして捉えるべきものとなっていく。また、聖書に描かれた悪とは「完璧であった人間の、神への不服従、傲慢、責任回避、すなわち、神への反逆行為」であるとされると山村氏は略述する。

第三章「グリーンランドにおける悪」においては、前章までの検証を踏まえ、「グリーンランド」と呼ばれるグリーン作品世界に描かれた悪について検証している。

グリーンは、この世は善と悪から成り立っていながら、善であっても邪と見なされ、悪であっても正と見なされる領域の存在を描くとし、このように善と悪を容易に区別できないものとして描くグリーン自身にとっての悪とは、人間に課された責任を回避する行為であることが導き出されるとしている。その理由として、山村氏は「グリーンランド」の風土がもっとも鮮明に描かれた『ブライトン・ロック』と、その素描であるグリーン短編小説「田舎ヘドライブ」には、悪とかかわりを持つ①登場人物の飲酒行為、②車、③動物、④凶器・危険物という四つの事物が用いられ、これらの事物は「グリーンランド」における悪を表象していることを明示し得ているからであるとしている。

第四章においては、グリーン作家活動において転機となった作品と言われる『叔母との旅』(*Travels with My Aunt*, 1969)における悪を表象する事物に着目し、この物語に見られる様々なイメージが、なぜ負から正へと転換されるように読者に受け止められるのか、本作品における事物による表象との関連においてその理由を分析している。

グリーンは、物語における様々な植物や自然に、語り手であるヘンリー(Henry)の理想的経験を表象させ、それらに「イメージの抑制」としての機能を担わせることでヘンリーに正のイメージを帯びさせる。くわえて、この物語自体が、オーガスタ(Augusta)が話し手となるメタフィクション構造であるゆえに、悪のイメージが抑制され、むしろ、ユーモアを喚起することを可能にしていると、山村氏は本作品に見てとれるグリーンの特異な表象機能を指摘している。

第五章から第七章においては、これまでの検証を踏まえ、80年代の三作品を事物による表象に着目し、それぞれを徹底解説している。

第五章は、『ジュネーヴのドクター・フィッシャーあるいは爆弾パーティー』の解説である。この物語において特に際立つ事物は、アンナ・ルイーズ(Anna Luise)のセーターである。彼女の真っ白なセーターが事故による出血で真っ赤に染まり、マホガニー色の美しい髪が、包帯を巻かれ真っ白く見えることで、彼女が負った怪我の重傷度が示され、事故によるアンナ・ルイーズのセーターの色の変化には、幸福であった夫アルフレッド・ジョーンズ(Alfred Jones)が不幸に転落するこの物語の分岐点が表象されている。また、この物語における登場人物の飲酒行為や様々な事物には、登場人物の人間性、ならびに、善と悪、悪の横行とそれを見逃す人々と社会、という物語の多彩な主題が表象されている。

第六章は『キホーテ神父』(*Monsignor Quixote*, 1982)の解説である。この物語において、聖職者用の衣類であるソックス、ビブ、カラー、ならびに、キホーテ神父(Monsignor Quixote)の愛車ロシナンテ(Rocinante)には物語展開における様々な分岐点が見て取れる。また、警察に追われ、傷つき、廃車同然となってしまった愛車ロシナンテには、キホーテ神父の死という結末が表象され、キホーテ神父とサンチョ(Sancho)による飲酒行為には互いの友情の深まりや親密度が表象されている。二人が赤ワインを飲みながら繰り広げる議論が信仰、教義、思想に関するものであるのに対し、白ワインを飲みながら繰り広げる議論は、神

父自身の社会学や政治論である。この物語に描かれた善からの逸脱と見なされてしまうキホーテ神父の行為に、読み手は完全なる悪を見出すことはできない。むしろ、純粹、敬虔、無垢であるキホーテ神父が、聖職者としての責務を理解し、自らの責任を果たそうと最後まで努めようとした姿が浮き彫りにされるとともに、この世に生きる厳しさと人生の空しさ、さらに無垢であることの怖さが鮮明となる。

第七章は『キャプテンと敵』(*The Captain and the Enemy*, 1988)の解説である。山村氏は、スモーク・サーモンとオレンジ・エイド、パジャマ、パン、飛行機、手紙、という事物、さらに、キャプテン (Captain) とジム (Jim) のウィスキー飲酒行為には、登場人物であるキャプテンとジム双方が負う「責任」と、彼らの「罪」・「悪」が表象されていると述べ、この物語は、一見するとグリーンの宗教意識が表立っておらず、そのテーマがグリーンの幅を広げている思われがちであるが、この物語における表象に着目することによって、登場人物が負う「責任」と彼らの「罪」・「悪」、ならびに、その「責任」を回避した、あるいは、全うできなかったことから彼らの関係性が崩壊し、自滅を呼び寄せるように見える者たちの姿が見て取れると解している。

第八章において、山村氏は、グリーンが批評した、あるいは、グリーンと比較されることが多い五人の作家 (R. ハガード、M. ボウエン、E. ウォー、H. ジェイムズ、S. モーム) の作品における登場人物の飲酒行為や様々な事物とこれまで検証したグリーンの作品におけるそれらに着目し、表象の観点から比較考察している。比較考察の検証結果として言えることは、グリーン作品における登場人物の飲酒行為や様々な事物には、ほかの作家たちの作品におけるそれらより多種多様な表象の機能があり、悪が関連付けられている。これは、他の作家たちの作品には見られないグリーン文学における特質であると見なして差し支えないと山村氏は言明する。

以上、グリーン作品において、登場人物の飲酒行為、乗り物、動物、凶器・危険物は、悪を表象する機能を果たし、「グリーンランド」の主要構成要素となっているが、80年代の三作品においては、動物は用いられておらず、その他の様々な事物が用いられている。山村氏はこれを、時代の変化に伴う住居環境や衛生環境の変化の表れであるとし、これらを表象の観点から検証することで、時代、世代、環境が変化しようとも、責任の回避・放棄こそグリーンにとっての「悪」であることが導き出されるとしている。

#### 4. 本論文の問題点と今後の課題

①序論において表象の定義を記載しているが、定義に基づいて表象を順次検証していくということに必ずしもなっていない。表象の定義を述べただけであれば、特に定義の記載は余分であろう。

②本論文は、グリーンが描く悪に焦点を合わせることで見えてくる四つの事物がグリーンランドの悪を表象する主要素であるとして論を展開している。だが、異なるテーマに焦点を合わせた場合、四つ以外の様々な事物が浮上する可能性があり、それらの事物には悪が見て取れるだけでなく、善や正義感や愛も見て取れる。それゆえ、そうした異なるテーマに着目して見えてくる事物が悪以外に何を表象するのかについては論証の欠落があるので、今後の課題として取り組むべきである。

③本論文は、1930年代から70年代におけるグリーン作品の主要作品を論じたうえで、80年代の三作品を解説しているが、グリーン作品のすべてを80年代の三作品同様に徹底解説することにより、山村氏の論証がより確固たるものになると考えられる。また、各年代の傾向というものもより明確に見えて来るであろう。

④本論文は、グリーンが批評した、あるいは、グリーンと比較されることが多い5人の作家の作品における事物の表象とグリーン作品における事物の表象について比較考察している。したがって、本論文は上記5名の作家のそれぞれの文学の特質ないし全体像を見出そうとする研究ではないが、比較対象作品をさらに増やすことで、論証はより確かなものとなることは言うまでもない。その意味で、この問題への取り組みは、グリーン文学の研究のみならず、他の作家の文学研究へと導く可能性があるため、汎用性のある研究の方法論の確立が課題である。

#### 5. 本論文の成果

第一の成果は、山村氏が、グリーン文学の研究対象とされることが最も多い作品の一つである『ブライトン・ロック』とその素描である「田舎ヘドライブ」を解説することで、グリーン文学の主要テーマであ

る悪を表象する主要な四つの事物を導き出したことである。それらは、①登場人物の飲酒行為、②乗り物、③動物、④凶器・危険物である。これまで、『ブライトン・ロック』に関する先行研究において、登場人物が常に隠し持つ剃刀と硫酸に着目した論考が数多くある。しかし、この物語から、これら四つの事物が用いられていることに着目し、これらの事物のすべて、あるいは、いずれかが、グリーンの数々の作品に用いられていることを明らかにしたものは、これまで見当たらない。しかも、それらに着目した解説により、グリーンにとっての悪が自らに課された「責任」と関係していることを明確に探り当てている。

第二の成果は、グリーン文学のなかで最もユーモアあふれる作品と称される『叔母との旅』における事物に着目し、物語に描かれた悪やこの物語が与える負のイメージを提示したうえで、それらを抑制する機能が物語に描かれた植物に担わされていることを、表象の観点から検証し導き出したことである。山村氏は、これまでの先行研究において論じられているこの物語のメタフィクション構造にくわえ、物語における様々な植物や自然に、語り手であるヘンリー（Henry）の理想的経験を表象させ、それらに「イメージの強調」としての機能ではなく「イメージの抑制」としての機能を担わせることで、ヘンリーについて読者に正のイメージを与えることを明らかにしている

この物語に描かれたユーモアや、登場人物の悪に関した論考はこれまでに存在する。しかし、この物語に描かれた植物に着目した論考は極めて稀であるとともに、その植物が負のイメージを抑制しているという解説はこれまで見当たらない。これは、この作品において、これまで注目されることのなかった技法の一つの提示であり、この物語の新たな読み方の提示である。

第三の成果は、第一、第二の成果を基に、グリーン晩年にあたる80年代の三作品を、それらの主要登場人物と彼らの飲酒行為との関係性、ならびに、彼らの用いる車や飛行機、といった事物だけでなく、衣類や装飾品など様々な事物にまでも着目して新たな解説方法を提示したことである。これら的事物を登場人物が、いつ、どこで、どのように用いるか、あるいは、扱うかを検証することで、事物による表象を明らかにした論考はこれまで見当たらない。2000年に入って以来、国内におけるグリーン文学の研究のブームが去ったかのように思える現在において、本研究は先行研究がもっとも少ないグリーンの80年代の三作品をこうした事物による表象の観点から解説することにより、グリーン作家人生におけるテーマが一貫していたということを明らかにしている。すなわち、グリーン作品のテーマは、時を重ねるにつれ、宗教よりも政治や情勢を色濃く描き出すものへと傾斜していったと考えられる傾向にあった。しかし、本研究により、「責任」と「悪」の問題こそ、彼の作家人生における一貫したテーマであることが明確になったということで、これは、グリーン研究を前進させる新たな解説方法によるものと確かに言えよう。

以上、本論文はグレアム・グリーン小説世界構成する諸要素のうち、事物による表象に着目し、その特徴を明らかにするとともに、グリーン晩年の3作品を、事物による表象の観点から新たな解説を試みた果敢な研究であり、いくつかの問題と課題はあるが、本研究の目的をほぼ達成したと言える。

よって本論文は、博士（総合社会文化）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

平成28年1月28日